

# 猫蓑通信

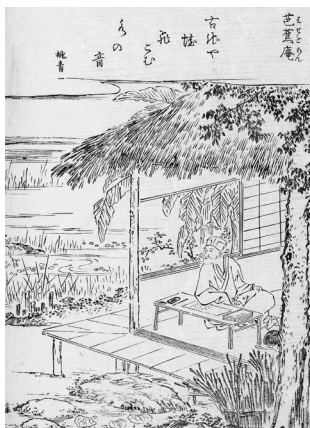
第127号

令和7年  
(2025年)  
6月30日発行  
(年3回発行)

## 深川芭蕉庵と跡地の変遷

江東区文化財専門員 斉藤照徳

江東区芭蕉記念館では、令和七年四月十八日(金)から八月二十四日(日)までの間、二〇二五年度前期企画展「深川芭蕉庵から今へ」芭蕉が築いた礎」を開催しています。本展では、松尾芭蕉が住んでいた深川芭蕉庵の変遷とそこでの暮らしや作品、芭蕉庵(あるいはその跡地である深川)に集った蕉門俳人や芭蕉を慕った後世の俳人を紹介するとともに、深川芭蕉庵跡地周辺の歴史について展示しています。筆者はこの展示の担当者で本稿ではその内容の一部として芭蕉庵とその跡地の変遷についてご



芭蕉庵(『江戸名所図会』)天保5~7年(1834-36)。後世の芭蕉庵図では、文筆する芭蕉、茅葺の草庵、パシヨウの木、古池がセットで描かれることが定型化

紹介します。

延宝八年(一六八〇)、芭蕉は俳諧宗匠としての生活を捨て、江戸日本橋から深川に移り住みます。その草庵ははじめ「泊船堂」と名付けられましたが、門人の季下に贈られたバシヨウがよく茂ったことから、「芭蕉庵」と呼ばれるようになりました。

芭蕉庵は三度建てられており、第一次芭蕉庵は小名木川と隅田川が交わる付近の「元番処(所)」といわれる場所にありました。地名の由来は、寛文元年(一六六一)に小名木川東端(現江東区大島九)に移転した幕府の船番所(江戸に出入りする船の関所)がもともと所在したことによります。ここに弟子で幕府御用魚問屋の杉山(鯉屋)杉風が所有する生簀小屋があり、そこを提供したとされます。天和二年(一六八二)に江戸大火で芭蕉庵が焼失すると、翌天和三年に芭蕉の友人・山口素堂が寄付を募り、門人・知人らの浄財によつてほぼ同じ位置に第二次芭蕉庵を再建しました。ここで有名な「古池や」の句を詠み、野ざらし紀行などの旅に出ました。元禄二年(一六八九)、奥の細道の旅に出る際に芭蕉庵は人に譲られますが、元禄五年に江戸に戻ると翌年には、旧庵近くに第三次芭蕉庵が建てられ、同七年の芭蕉最後の旅

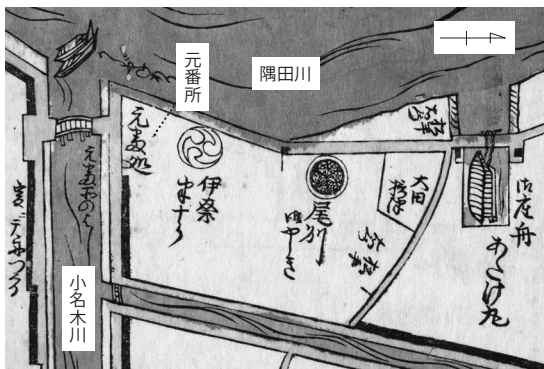
### ●目次●

- ▼深川芭蕉庵と跡地の変遷 斉藤 照徳
- ◎第百七十回例会(初懐紙) 作品 二十韻九巻
- ◎第百七十一回例会(藤まつり) 作品 二十韻六巻
- ▼執筆を終えて 三木 俊子
- ◎第29回えひめ俳句連句大会受賞作品歌仙三巻
- ▼【留書】働き者の力瘤 江津ひろみ
- ◎藤まつり正式俳諧・配役
- ▼事務局だより

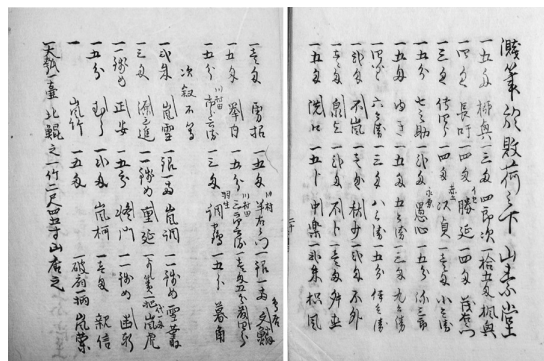
12 12 10 10 9 7 4 1

までの創作と生活の地となりました。

芭蕉庵での暮らしは簡素なもので、門人たちに支えられていました。柏筵(二代目市川團十郎)の日記(『老の楽』)によると、蕉門の破笠の話として、米を入れる瓢箪が台所にかけてあ



『江戸方角安見圖鑑』2巻(国立国会図書館蔵)  
延宝8年(1680)。芭蕉が深川芭蕉庵に入庵した頃の深川が描かれている。表記が簡略化されているため建物が少ない土地に見えるが、実際の当時の深川は町場として発展していた。



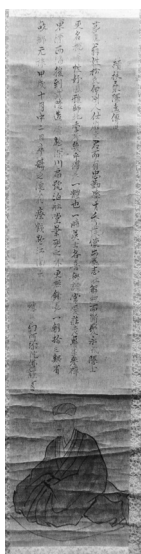
芭蕉庵再建勸化簿（夏目成美編『随斎諸話』乾）  
文政2年（1819）。山口素堂が募った寄付の芳名帳。50数人の寄贈者名と金品・点数を記載。「破扇一柄」「大瓢（ひさご）」などの遊び心のある寄付もある。

り、杉風ら弟子が来庵するとそこに持ってきた米を入れていたようです。越智超人の『鵲尾冠』には「草堂のうち茶碗十ヲ菜刀一枚米入るゝ瓢一ツ五升の外不入」とあり、わびしい生活が想像できる一方、茶碗が多く句会などで人が集まっていた様子がうかがえます。また、芭蕉庵の六つの什物（文台・大瓢・小瓢・檜笠・菊画・茶羽折）について綴った山口素堂の「芭蕉庵六物之記」も芭蕉の暮らしと創作をうかがわせる資料です。これらが芭蕉庵の什物のすべてとは思えませんが、芭蕉は質素な暮らしをしていた（あるいは志向していた）のでしょう。また、そうしたイメージはのちの芭蕉人物伝にも受け継がれます。蝶夢画賛「芭蕉坐像」には『続扶桑隱逸伝』所収の芭蕉伝が引用されており、「於

深川扁號泊船堂筆硯之外更無」と、隠棲した芭蕉が深川で文筆に勤しんでいる姿が想起されます。さらに芭蕉庵では、越人などのように門人・知人が寄宿・同居したり、頻繁に通って俳諧活動と共にすることもありました。『炭俵』の編者の野坡・孤屋・利牛とともに三井越後屋の奉公人仲間、しばしば芭蕉庵を訪ねて指導を受け、同書を編纂しました。『深川集』の編者である酒屋は元禄五年九月に食客として深川芭蕉庵に逗留して芭蕉に師事し、近江膳所に帰国後、その記念に同書を編みました。

芭蕉没後に芭蕉庵を見たという人の証言（池

五升庵蝶夢画賛 芭蕉坐像



贊に『続扶桑隱逸伝』の一文が引用されている。「泊船堂」は深川芭蕉庵のこと。草庵には筆硯以外は無い、というほどに芭蕉閑居のイメージがもたれていた。

田玄斎『病間雑抄』によると、草庵は、八畳と六畳の間と戸垣があり、バショウが植えられ、屋外に大穴があり、そこが古池だったとされています。そして、十四〜五年後に大名屋敷に取り込まれてしまったといえます。

芭蕉が亡くなったのち、数年間は門人の各務支考（『笈日記』）や広瀬惟然（『枕かけ』）が旧庵を訪ねており、庵は残されていたようですが、後に深川元町（現江東区常盤一）の尼崎藩松平遠江守家の屋敷に取り込まれます。しかし、

芭蕉庵（古池）の遺跡は松平家屋敷の庭の中に残されていました。同家十二代当主忠告（俳号亀文）自身が「その池は、今、予が別業の内に存して、ますます古池となれり」と記している（『続深川集』寛政三年「二七九」）ほか、同様の記述が諸書に見えます（『俳諧名所方角集』、『俳人百家撰』など）。同屋敷は幕末には紀州徳川家の屋敷に変わりますが、江戸切絵図（『本所深川絵図』）を見る限り同様に庭中に芭蕉庵の古跡があったようです。

ところが明治以降、土地の所有者が移り変わ



『本所深川絵図』嘉永5年（1852）  
小名木川の隅田川口、万年橋の近くの「松平遠江守」屋敷内に芭蕉庵跡が残されていた。

り、紀州徳川家から山口藩毛利家の屋敷となつたのち、明治六年（一八七三）に琉球藩王尚泰の蔵屋敷として明治政府から払い下げられます。当時、尚泰は政府により東京に召喚され飯田町（千代田区）に屋敷を与えられていましたが、その屋敷だけでは藩の東京での活動には不足であり、物産品貯蔵のための蔵屋敷取得を希望しました。それに応える形で深川芭蕉庵跡にあった山口藩毛利家屋敷の払い下げが行われたのです。そして、その後の詳細は不明ですが、

明治十六年（一八八三）には実業家・米倉一平の所有地となっています。米倉はこの土地を貸倉庫・貸家・貸地経営に使っていたようで、蔵など琉球藩屋敷の建物も活用したと思われる。米倉は芭蕉庵跡地の庭園を破棄した、とする著述もあり（磯ヶ谷紫江「芭蕉庵址をたづねて」『墓碑史蹟研究』三一、大正十五年）、この頃には芭蕉庵の遺跡も消滅したようです。さらにその後、大正十年には野田醤油株式会社（現キッコーマン）が一带の土地を登記しています。変わりゆく地域で芭蕉庵の記憶も薄れていくなか、大きな変化が起こります。大正六年（一九一七）九月の高潮による洪水のち、芭蕉庵跡地から蛙の石像が発見されました。地域の人々はこれを芭蕉が愛でた石の蛙であると考え、かつてこの地に芭蕉庵があったという記憶が呼び起こされていきます。そして、この文化的価値がある場所を長く守っていくために、有志により芭蕉稲荷神社が創建されました。なお、芭蕉稲荷神社の地所は現在でもキッコーマンの厚意により無償提供されています。



芭蕉遺愛の石の蛙（伝）  
大正6年に現在の芭蕉稲荷神社の敷地から出土した蛙の石像

しまいました。しかし、芭蕉の流れをくむ旧派俳家にとっても重要な場所と考えられていたようで、昭和十八年の芭蕉二百五十年忌にあたり、蕉門の太白堂桃隣を祖とする太白堂十世日比野桃月により、石造りの芭蕉堂が再建され、堂内に芭蕉像と石の蛙が安置されました（堂在銘由来文による）。これが功を奏し、昭和二十年の東京大空襲でも芭蕉堂は焼失を免れ、現在は江東区芭蕉記念館庭園に移設・保存されています。江東区としても史跡を保存していくという機運は高まっていき、昭和五十六年（一九八一）に江東区芭蕉記念館を開館し、平成七年（一九九五）には芭蕉庵跡地の周辺に芭蕉庵史跡展望庭園を開設しました。園内には杉山杉風画の芭蕉像を模写した作品を参考にした



朝木良之助画「昭和廿一年七月二十九日芭蕉庵址図」  
昭和37年（1962）。戦後まもない芭蕉庵跡（芭蕉稲荷神社）を懐古して描いた作品。雑草の生い茂る境内に鳥居と芭蕉堂、空襲で焼け焦げた銀杏の木、焼失した芭蕉稲荷社の台石がみえる。



芭蕉堂と「ふる池や」句碑が芭蕉記念館に移設される前の芭蕉稲荷神社境内（撮影年不明）  
玉垣（左）には「野田醤油株式会社」の文字

ブロンズ製芭蕉像も作られました。ちなみにこの像は、午後五時になると自動で九〇度回転し、隅田川の方を向く仕掛けがあります。これは当時の区の担当者が、午後四時半以降の閉園後は芭蕉像を見ても見えなくなることを残念に思い考えたサービスのアイデアでしたが、「動く像」というフレーズが独り歩きし、新聞に怪談話のように取り上げられたこともあります。

延宝八年に芭蕉が深川に移り住んで以来、芭蕉庵とその跡地は幾多の変遷を経ながらも、芭蕉を慕う人や地域の人々によって今へ守り継がれ、地域の礎となりました。そして、これからも松尾芭蕉が江東区に残した偉大な足跡を長く後世に伝えていくことが望まれます。



史跡展望庭園の芭蕉像

\*参考文献(1)松尾勝郎『芭蕉点描』一九九一、有精堂出版 (2)三原尚子「桜井松平家と古池跡・古池はいかにして「現れた」か」『國文學』第一〇三号、関西大学国文学会、二〇一九

第百七十回例会  
初懷紙作品 二十韻九卷 156

君子蘭の座

二十韻「名跡を継ぐ」 小林静司 捌

名跡を継ぐ目出たさや日脚伸ぶ 静司  
水の輪描く濠の白鳥 鑑  
高々と跳び箱越える子等のあて ひろみ  
カレーライスがとても楽しみ 雅子  
マンションの窓に満月皓々と 弘子  
別れにくれた紺菊の意味 司  
赤い糸結ばれてゐる恋さやか 鑑  
音信を絶ち志願入隊 雅  
国境は見渡すかぎり砂漠なり 弘  
すき間時間に作詞作曲 司  
ナオ ゴキブリの天敵として妻の技 鑑  
浴衣姿で月愛でる酒 み  
血圧計体重計は遠ざけて 雅  
再婚式は今や秒読み 弘  
べつたりとついで離れぬアーティスト 司  
恐竜化石新種認定 鑑  
ナウ 国政は地方創生焦点に 弘  
寄附を頼りに移動劇団 み  
植糸ついで今爛漫の花の山 雅  
子猫をひざに風のやはらか 弘  
連衆 荒木 鑑 江津ひろみ 武井雅子  
市野沢弘子

山吹の座

二十韻「二世燦然」 東條士郎 捌

初懷紙市ヶ谷二世燦然と 士郎  
新しき世の出づる櫟 千恵子  
幕開けはとちりの席に陣どつて 洋子  
蒲鉾よりも伊達巻が好き 肇  
月ほのか亀帰りゆく水の底 荷夕  
ふるさと今や衣打つころ 郎  
草紅葉褥に愛を語つたね 千  
式部隠した道ならぬ恋 洋  
盗賊のかき分けてゆく虎が雨 肇  
汗もとどにアブラカダブラ ※ 夕  
ナオ この地球に悪しき諍いさかひなくもがな 郎  
べらんべらんと尾を舐める猫 千  
京の味銘あるペットフード買ひ 洋  
妖まじかしき月に濡れる寒紅 肇  
元もとの彼女の「母となります」 櫛明り 夕  
三叉路に立ち右か左か 郎  
ナウ きつぱりとやらねばならぬ時がある 肇  
湖北の春に観音の笑み 洋  
花のなか歓喜の歌の鳴り響き 千  
風やはらかにいささかの酒 夕  
※ナオ折端 アブラカダブラⅡ呪文。歴史 肇  
的には、お守りに刻印しておくとか治療力 千  
があると信じられていた。 洋

連衆 鈴木千恵子 大島洋子 宇田川肇  
西田荷夕

椿の座

二十韻「初駅に」 村松定史 捌

初駅に客なごやかに待つのでみ 定史  
淑気みなぎる真つ青な空 遊眠  
心地よく洗濯物を干す朝に 弘  
すらすら唱ふ二桁の九九 敦子  
ウ ムーンリバーそつとレコード針を置き 秀夫  
庭の隅からちちる虫鳴く 夫  
友来ると電話が告げて濁酒 敦  
トランプ占ひハート出るまで 眠  
夏籠とうそぶく離れ人払ひ 敦  
飛込み台で勇氣百倍 眠  
ナオ 銘木のクローン培養試みて 夫  
同邦快拳ニュース速報 同  
三毛猫の機嫌伺ふ秋田犬 眠  
ぶさ可愛いと彼に言はれる 夫  
炬のそばで恋語りして望の夜 夫  
碎氷船は一路救助に 夫  
ナウ 温暖化頭痛の種がふくらんで 夫  
入学祝ひ貰ふパーカー 敦  
六方で決める舞台の花の道 史  
春挽糸のぴんと張る音 敦

連衆 内田遊眠 福澤をんみ 武井敦子  
田中秀夫

染井吉野の座

二十韻「立机免状」

坂本孝子 捌

謹みて立机免状初懷紙 孝子  
陽射しを受ける仙夢の艶 美智子  
飛ぶごとく走る兎を追ふならん 濤声  
ひよいと顔出しあやす嬰兒 端七  
道長の絵巻の月もつひに欠け 陽一郎  
村芝居には氣取るドンファン 未悠  
もう逢へぬ別れに残る檸檬の香 七  
焦土とはなり夫征きし跡 声  
洛中の上ル下ルに寺ばかり 智  
本堂に響く琵琶の音は誰 悠  
ナオ有明にはや鳴き競ふ蟬の声 陽  
投資熱湧く臨時収入 悠  
女癖悪い奴ほどよく眠り 声  
氣付いた時は糟糠の妻 陽  
サバンナの群を続べたる牝ライオン 智  
インバウンドで酒場賑はひ 声  
ナウ潮の香にふと甦る俺の嘘 七  
仕上げに見せる金継の技 智  
山路来て吉野の花は降りやまず 声  
亀の鳴くらん叢の石 智

連衆 聖成美智子 小原濤声 松本端七  
秋山陽一郎 棚町未悠

令和七年一月二十六日 首尾  
於 アルカディア市ヶ谷

節分草の座

二十韻「白光」

根津 忠史 捌

白光の灯火雑煮の箸匂ふ 芦丈翁  
御慶を交はす晴れやかな顔 忠史  
スタジアム決勝ゴール決まるらん 美友紀  
犬といつしよにハイタッチして 明子  
山の端にゆつくり上がる望の月 秀四郎  
紫苑の大株庭の中央 秀葉  
忍び込む源氏の君に濁り酒 アンズ  
爪の形をいつもほめられ 紀  
兄嫁の着替への音にときめいて 史  
一線を越ゆるひそやかな闇 秀  
ナオ將軍は皆老鷲となりたまふ 明  
夏念仏の僧に黙礼 ア  
壺を割り素早く逃げるワンパクら 秀  
ストーブル車恋も焚きます 史  
雪女郎月夜の晩の落とし胤 紀  
吉の出るまでお神籤を引く 明  
ナウ村長の十八番いつものど演歌で 秀  
友と会ふ日に選ぶ春帽 葉  
文台に墨痕淋漓花の舞 ア  
博物館の池に川蟻 紀

連衆 奥野美友紀 野口明子 高尾秀四郎  
木越秀葉 松島アンズ

枝垂桜の座

二十韻「寒紅梅」

平林香織 捌

寒紅梅色香弥増し雅びたり 香織  
笑顔あふるる春近き頃 善春  
自転車ペダル軽々踏み出して 霞  
校舎のむかふ続く山並 鄭和  
月を斬り突き抜ける声居合抜き 香里  
画布縦横に干し柿を描く 俊子  
秋遍路若い二人のうらやまし 和  
改札越しに頬を撫であふ 俊  
トスカーナ町はづれまで長き壁 和  
太つた猫ののそりのつそり 霞  
ナオ冷蔵庫中に暮らしの味を詰め 善  
涼しき月に届く速達 俊  
ドラ息子やつと来てまたすぐ帰る 里  
素戔鳴といふ我儘な弟 和  
恋に恋愛練り返し玉の輿 里  
ベンチプレスでムキムキの背 善  
ナウ水槽の伊勢海老じつと動かざる 俊  
帷子雪の残るあけぼの 和  
花を賞で酒を愛でつつ車座に 霞  
震災記憶継ぎてうららか 執筆

連衆 鈴木善春 高塚 霞 高山鄭和  
式田香里 三木俊子

第百七十回例会  
初懷紙作品 二十韻九卷 7ゝ9

木瓜の座

二十韻「丹頂や」

林 転石 捌

丹頂や誹諧の空悠々と

転石

共に訪ねん寒梅の里

徹心

電動の自転車借りて軽やかに

幸子

友だちの犬と交はす挨拶

吉文

山の端に光やさしき月の出づ

禎子

あては菊芋盃は信樂

禎

万鬼祭きりとひいた口の紅

心

宅配のあとそつと逢引

文

トレンドのドレスを粋に着こなして

幸

ゲストを招きクルージングへ

文

ナオ足を組み頬杖をつき桜桃忌

禎

南南西へ風見鶏向く

心

震災前神戸の街はかくありき

幸

今日は吉日宝くじ買ふ

文

月凍つる賭けの勝率五分と五分に

同

指をしならせ王手飛車取り

心

ナウ望まれて老舗の宿の若女將

禎

土産の下駄で春のパリゆく

同

しだれ花脇の流れに鳥遊ぶ

幸

酒もうれしき曲水の宴

執筆

連衆 佐藤徹心 飯島幸子 永田吉文

竹中禎子

黄水仙の座

二十韻「べつぴんの猫」

石川 葵 捌

べつぴんの猫初春の風を編む

葵

年のはじめのいとどめでたし

有子

千代紙を切つて貼り付け地図にして

英雄

スマホ頼りの電車乗換

壘

ウ 健やかに眠る吾子へと月射せる

純子

名残の蚊帳に忘れえぬ影

葵

実紫より可憐な君は小紫

有

この家の刀目の楚楚とした辞儀

雄

午前五時お数珠頂戴善光寺

壘

蓮池巡る列の長さよ

純

ナオ 黒鯛の昆布締酒の当てとして

壘

みな誉めそやす金継ぎの皿

雄

幽かなる音が開かずの扉より

有

遊女の文の焦がれ飛び交ふ

葵

王位捨て寒濤渡る俺の愛

純

スノータイヤを準備する月

壘

ナウ 歌枕探し求めて洛に入る

雄

供養の針があまた豆腐に

有

花朧夢も朧のこの浮世

葵

ムーミン谷へ遠足の夢

純

連衆 佐々木有子 鈴木英雄 竹中 壘

近藤純子

紅梅の座

二十韻「新宗匠」

五十嵐譲介 捌

新宗匠ぬすまひ凜々し初懷紙

譲介

淑氣漂ぶ連衆の声

桜千子

一羽づつ雀砂場に降りて来て

あき子

手と手をつなぎ進む園児ら

正夫

ウ 絵に描いたまん丸の月まつ黄色

万迷

カーブルカーの風のさやかに

志保子

流し目の妖しき女形村芝居

桜

推しの待ちぶせまでも空振り

迷

ホームラン打つた翌日土用灸

桜

尺取虫の努力もくもく

あ

ナオ びつしりと赤線付箋参考書

夫

同窓会はみんな白髪で

同

お茶席に名物茶碗お披露目す

志

噂の美女は歩くヴィーナス

迷

凍月も溶かす二人のキスシーン

桜

轍遙かに水仙の道

志

ナウ 越前の活断層はうごめくか

同

遍路の旅へ杖をつきつつ

夫

普請中明雅文庫に花吹雪く

譲

一期一会のうらかな庵

あ

連衆 鵜飼桜千子 岩崎あき子 國司正夫

吉澤万迷 北龍志保子

第百七十一回猫蓑会例会  
藤まつり作品 二十韻六卷

13

八重藤の座

二十韻「風と語るや」

石川 葵 捌

過ぎし日を風と語るや藤の下

葵

つぶにこし餡旨い草餅

秀夫

町興し口ゴ入り団扇張ることに

肇

追ひかけつこの猫の兄弟

未悠

月照らす小さき社と雪兎

夫

定年まぢか着ぶくれてゐる

葵

憧れは芸人といふ東大生

悠

どんな方でも私OK

肇

だんなには昔論吉で今榮一

葵

毎朝してるラヂオ体操

夫

ナオ 発声はアイウエオア野外劇

肇

十王詣道ははるかに

悠

旅客機の隣の席が気になつて

夫

かわいいのをこの手の平に乗せ

葵

超絶美女解き放たれて月世界

悠

私立探偵はり込みの秋

肇

ナウ 裏山に千本湿地によきによきと

葵

伽羅に寸門陀羅回る聞香

夫

宮中の宴殿か花の苑

肇

胡蝶舞ひたる邯鄲の夢

悠

連衆 田中秀夫 宇田川肇 棚町未悠

山藤の座

二十韻「足の先」

鈴木了斎 捌

山藤や湯の面に透ける足の先

了斎

雀隠れをボール転がる

恵美子

淡雪に子供らの声湧き立ちて

をんみ

こちら向かない座布団の猫

徹心

ウ 月明のカーテン揺らす夏の風

万迷

待ち人が来るやうな気をする

香里

おみくじの恋を信じてみたいから

み

天神様の境内の鳩

美

重なつた亀に見物客が群れ

心

日向ぼこしてはや九十九髪

み

ナオ 桐箱に凍つる金継ぎ井戸茶碗

迷

素檜を構へ謡ふ敦盛

心

新弟子は外つ国からの人ばかり

里

摩訶不思議なるしぐさあれこれ

同

馴初めは月夜の故にのめり込み

み

燃ゆる炉火欲しそして君欲し

斎

ナウ やかましいほどちろる鳴く枕許

心

スマホいつでもサイレントにて

迷

ぼんやりと海を見てゐた花の蔭

美

遠く白帆の消ゆる春愁

心

連衆 関口恵美子 福澤をんみ 佐藤徹心

吉澤万迷 式田香里

白藤の座

二十韻「神楽殿」

鈴木英雄 捌

藤咲きこぼれ紙垂揺るる神楽殿

英雄

友と語らふ春尽の苑

雅子

囀にそぞろ歩きの足止めて

霞

自転車道路申し訳ほど

俊子

ウ 文机に古いアルバム月寒し

裕司

スケート靴でワルツ舞ひし夜

霞

ひたすらに胸の面影追ひ求め

雅

きれいな眉に墨入れる女

司

贗作も画竜点睛よく真似て

俊

霊峰富士にかかる笠雲

雅

ナオ 炎昼をベビーカーの子よく眠り

霞

軒の風鈴音色たのしむ

俊

渡し舟浦賀の海は波静か

司

嫦娥笑ひて送る流し目

霞

虫すだく隠れ宿にて初枕

英

菊の鉢あり被災地の路地

司

ナウ 土作り精魂込めて老迎ふ

俊

ふと口ずさむアニーローリー

雅

AIで銘酒を醸す蔵に花

俊

頬を撫でゆく佐保姫の裾

霞

連衆 武井雅子 高塚 霞 三木俊子

小川裕司

令和七年四月二十四日  
於 亀戸天神社

第百七十一回猫蓑会例会  
藤まつり作品 二十韻六卷 457

野田藤の座

二十韻「藤棚」

鵜飼桜千子 捌

藤棚や対角線に抜ける風 桜千子  
太鼓橋にて出迎へる虻 由紀子  
遠足の声近づいて遠のいて 千恵子  
塩昆布よりツナマヨが好き 陽一郎  
綺羅綺羅と寒月渡る銀世界 由  
涙痕ひとつ絨毯の隅 桜  
振られても生命とられたわけぢやない 陽  
女を磨くエステサロンで 千  
知らぬ間に湿った瓶のシリカゲル 桜  
けふも乾拭き本堂の床 由  
ナオ 胆試し顔にべつたりこんにやくが 千  
かかあ天下が呷る冷酒 陽  
うちの猫隣の犬に牙をむき 由  
二百十日のトリアージタグ 桜  
月光で読む付け文の小さき文字 陽  
吉野太夫忌尽す純情 千  
ナウ 張りぼての岩は涅槃色旅一座 桜  
SNSで近況を知り 由  
留学生日本の花に祖国恋ふ 千  
春たけなはに暫し転寝 陽

連衆 馬場由紀子 鈴木千恵子 秋山陽一郎

長藤の座

二十韻「藤浪に」

荒木 鑑 捌

藤浪に見えて隠れる太鼓橋 鑑  
亀の寄り着く土匂ふ岸 忠史  
遠足の子らは車座笑顔にて 明子  
おまけの付いたチョコレート好き 荷夕  
木枯らしの吹き残したる二日月 あき子  
熱燗交し迫る結婚 鑑  
学歴と背の高さにほれました 史  
九九暗誦のちよつと暗礁 明  
トランプにMAGAのキャップを被らされ 夕  
防犯カメラあちらこちらに あ  
ナオ 時鳥声だけ確と聞こえて 鑑  
怪談噺つばきごつくん 史  
首つ玉わざと抱き付く人の夫 明  
忘れ扇に捜す君の香 夕  
果てしなく山裾までも蕎麦の白 あ  
月皓々のバチカンの屋根 鑑  
ナウ 抜いて行く電動自転車口惜しい 史  
家族会議の免許返納 明  
君も来よ平和な御世の花の頃 夕  
弥生の空に雲のたなびく あ

連衆 根津忠史 野口明子 西田荷夕

岩崎あき子

紫藤の座

二十韻「太鼓橋」

國司正夫 捌

太鼓橋渡り一札藤まつり 正夫  
筆筆築の長閑なる庭 孝子  
お座敷の利茶の席の静まりて 健  
酸いも甘いも噛み分ける知恵 洋子  
短夜の月ついてくるハイウェイ 遊子  
幼なじみの帰省するとか 純子  
決まりたる身受けばなしの哀しくも 孝  
晴耕雨読聞ごとの他 健  
予報士の資格をとりて出演す 純  
電波時計の狂ひ七分 遊  
ナオ 長々と作る行列息白し 洋  
吾に道聞く雪女あり 遊  
そもそもは王妃の嫉妬戦火湧く 孝  
媚薬を少し醸す葡萄酒 洋  
月光を背に受けつつ露天湯へ 純  
美術展へと大作を出す 夫  
ナウ 貨物便会社の株は上向きで 孝  
悠々自適の老後夢みる 洋  
気に入りの形に残す花衣 孝  
貝づくしには満ちる春の香 洋

連衆 坂本孝子 由井 健 大島洋子  
本多遊子 近藤純子

花美短の座

二十韻「撫牛の」

武井 敦子 捌

撫牛のそこそこ光る藤まつり

敦子

ホバリングして離れゆく蜂

ひろみ

紙鳶引き摺り駆けるグラウンドに

鄭和

確認すればあすは日直

有子

書き割りのまんまる月に拍手わき

揺子

忘れ扇の香りほんのり

敦

新酒干し頬染めた君抱き締める

み

強く囁まれた跡のいとほし

鄭

我が家の元祖はもしや吸血鬼

有

鍼投法打者を寄せ付けず

揺

ナオ雪解富士六根清浄唱へつつ

敦

ムシヨになかったアイスクリーム

み

お使ひはお金にぎつて気をつけて

揺

還暦を過ぎもて期到来

有

蕪村の忌赤い蹴出しに月隠す

鄭

笹鳴き微か裏の竹藪

敦

ナウギター背負ひ旅の行方は足まかせ

み

浮かれた雲を追ひて終日

鄭

理髪店けふが最後と花仰ぐ

有

家族揃ひて春田打つ頃

揺

連衆 江津ひろみ 高山鄭和 佐々木有子

上原揺子

執筆を終えて 三木俊子

昨年初夏の頃、執筆のお話を頂いた時は、「出来るかしら」という不安と「順番の都合もありそうだから、お断りしては悪い」という二つの思いで揺れ動きましたが、意を決してお受けしました。初めは手順書きを暗記してばかりいましたが、第一回稽古の折、動きが全くついていかず、「少しずつでも毎日実習すること」と助言頂き、転石様お手製の文台で繰り返し練習しました。拝借した式田恭子様と佐々木有子様の録画は、間の取り方、発声の仕方などとても参考になりました。但し、最初に拝見していたら、とてもお受けできなかったと感じました。お二方とも、内容が立派なだけでなく、姿形美しく、圧倒されました。坂本孝子宗匠、鈴木千恵子宗匠、鈴木了齋様と重鎮の方の少し前のご様子と共に、故人となられた方々がお役をされている姿が偲ばれ、見る度に懐かしさに時を忘れ、何とも言えぬ心持になりました。

十月の芭蕉記念館での興行は、慣れぬ袴姿で立ったり坐ったり、片膝を立てたり（歌膝）、直したりと、文学と言うより体操をしている感じでした。この四月、満開の揺れる藤房を見晴るかす亀戸天神社神楽殿では、立礼で行われ、歩くのも少しかで、知司や解説者のしつかりした声音や物珍し気な見物衆の視線に助けられ、幾分か落ち着いて運べたように感じました。練習中首っ引きでした手順書きの註に、真行



草の礼は、茶道裏千家のきまりにならつてとあり、少し肩の力が抜けた気分になりました。昔、女子高でお作法を教える友人の、「家元縁りの方のベストセラーの礼法の本を参考にしている」との発言に、「あんな町方の物を……」と噂したのを思い出しました。けれど、連句は元々身分をこえて同好の者が集まり、句作する座の文芸であり、手順の暗記に加え、正式俳諧という厳めしい名称にガチガチになっている自分の不明に気づかされました。町方のゆるやかな儀式であつてこそ俳諧の連歌ではないかと。

とは申せ、当日は間違えずに進めるのに精一杯で、「覚えた事を全部忘れて、体が自然に動いてこそ」の極意には程遠く、ご指導くださった方々、御同席、御見物の皆様をハラハラおさせしたことで、申し訳なく思っております。

終りに近く、硯を掲げて菅公の御影の前を進み退場する時の何とも言えないほつとしたうれしさと、六十の手習いで始め二十余年の連句のお陰で、執筆のお役を務めさせていただくという思いもかけぬ冥途のみやげに感謝する日々でございます。

第29回えひめ俵口連句大会受賞作品  
歌仙三巻 153

俵口実行委員会会長賞

歌仙「力瘤」

江津ひろみ 捌

冬近し働きの力瘤

江津ひろみ

印半纏鉋研ぐ月

高塚 霞

刈田道深き轍の交差して

石川 葵

またつつかへる九九の九の段

み

デイベートの会場徐々に熱気おび

霞

大きな薬缶麦茶たつぷり

葵

お日さまに向かひ真つ直ぐてんと虫

み

サンバのリズム聴けばウキウキ

霞

恋の種選んで拾ふ娘達

葵

惚れた相手は組の親分

み

古書店の棚に並んだ捕物帖

霞

棋譜を睨んで盤を睨んで

葵

月蒼しホットウスイスキー染みわたる

み

のつしと歩く猫に寒風

霞

ここかしこ鴉の会話忙しく

葵

流れ着いたはこの港町

み

飛花落花托鉢僧に刻む皺

霞

崑崙遙か春雷を聞く

葵

ナオ山一つオレンジ色に伊予蜜柑

み

夢を追ひかけジャンプする子等

葵

AIなら異星交信出来るかも

霞

荒唐無稽で憎めない嘘

み

包丁もまな板もなき新婚さん

葵

キスした後は水飲んで寝る

霞

売れるまで二人で汗のどき回り

氏神様は夏藤の陰

小声にて己が病のことを告げ

美田を持たぬ主義を貫く

月の舟海に光の水脈残し

うつすら甘き橡の実の餅

ナウ猪が出たと警官巡回中

名字ほとんど村の名前で

普段から大風呂敷を懷に

屈託ぎゅつと押し込んでみる

ほの明るき出口に続く花並木

お玉杓子の小さき手と足

令和六年十月十四日 起首

令和七年一月十七日 満尾 文音

【留書】

働きの力瘤

江津ひろみ



受賞の三人。左から著者。高塚恵子、高塚霞、鈴木鈴木各氏

このたび俵口実行委員会会長賞を頂き、大変感激しております。周りの方々のお陰と思うと、感謝しかありません。連衆を代表しての受賞とは言え、何やら面映ゆい思いです。

私ごとではありますが、昨年引越しをしました。何しろ三十年間の壮大なゴミ箱と化した家を引き払うのですから、それはそれは大ごとです。脳力、気力、体力全て衰え呆然とするばかり。そして、多くの方の力をお借りすることとなりました。年齢性別、様々です。

普段私がお付き合っている方は、ほぼ高齢

です。勿論私も立派な高齢者。スーパーに行ってもご近所さんも、同年代の方がほとんどです。久々に若者に接する機会でした。

キリリと長髪を三つ編みにして爪にきれいなネイルを施した青年が、テキパキと指示を出し、高齢のこちらの意向を丁寧にくみ取りながら仕事を進めます。これに感激せずにはいられないでしょうか。あるとき三人で来た若者達。派手な緑色、明るいピンク、白に近い銀色、それぞれが思い思いにきれいな色に髪を染めた若者達でした。思わず心の中で叫びました。「おいおい、かき氷? メロンとイチゴとミルクのかき氷だよ!」と。その三人組、挨拶もそこそこに作業を始めると、その集中力のすごいことすごいこと。昨年の夏の異常な暑さの中、エアコンも効いてない室内で汗まみれになりながら、ミリ単位の力仕事を黙々とこなしていきましました。バイアスのかかった見方し olmayan 自分を恥じるばかりです。

みんな「力瘤」を作りながら働く働きの者達でした。誰もが一生懸命に真面目に生きてるんだ、と何度も胸を熱くしました。

老いも若きも必死に生きている。こうした人たちが、安心して平凡で幸せな生を全う出来る世の中であって欲しいと、強く感じます。

最近のニュースは、国の内外を問わず心が暗くなるようなことばかり。二十一世紀にこんな戦争が起これるとは! 被災者の救助も覚束ないとは! 等等……。『力瘤』の働きの者達に幸あれと願わずにはいられません。

松山市長賞

歌仙「蜚かな」

高塚 霞 捌

樹下深き昏き水より蜚かな

高塚 霞

瞳凝らせば夏の瞬石川

石川 葵

地図上の見知らぬ街に夢馳せて

江津ひろみ 霞

ふらりと入る四つ角のカフェ

葵 霞

七夕の笹さらさらと月昇る

葵 霞

酸漿鳴らす姉と弟

み 霞

ほつれ毛を上げて女将は秋刀魚焼く

葵 霞

貫き通すささやかな嘘

み 葵

齢ぐらいほんとのことを教へてよ

み 葵

円周率はπで表す

霞 葵

少年はローラースケート足となし

葵 霞

きつと未来は山の向かうに

み 霞

遙か望む常念岳は冬化粧

霞 葵

煤払終へ月の本堂

み 葵

世話役は三里にでかい灸据ゑて

葵 霞

明日の予定を書き出してみる

霞 葵

落花霏霏遠き記憶のこま送り

葵 霞

海市に浮ぶ古都の楼閣

み 霞

ナオ 旧街道輪を描く鳶うらけし

霞 葵

Uターンして農業を継ぐ

み 葵

恋人は洗ひぎらしの作業服着て

葵 霞

はじめましてと青い目の嫁

霞 葵

言葉よりくねくねとボディランゲージ

み 葵

餌をねだつて甘鳴きの猫

葵 霞

百物語お江戸上野に掛かる小屋

霞 葵

昼寝いつしか座敷童と

み 霞

ほどほどに生きてめでたく白寿なり

葵

癖くつきりとロッキングチェア

霞

重たげな月に琥珀のウイスキー

み 霞

初獵待ちて準備万端

霞 葵

ナウ 愛用の厚手の上着冬近し

葵 霞

エアターミナル言語飛び交ふ

霞 葵

想ひ出は見えないけれど宝物

み 葵

博士課程も残り一年

葵 霞

三番叟踏み納めてふ花衣

霞 葵

両手のひらに受ける淡雪

み 霞

令和六年六月二十六日 起首

令和六年九月二十三日 満尾 文音

松山市文化協会長賞

歌仙「舌状台地」

鈴木千恵子 捌

春疾風舌状台地なめてゆく

鈴木千恵子

緩斜面には片栗の花

宇田川 肇

雛の客大小の靴揃ふらん

近藤 純子

三毛猫撫でる兄の膝の上

篠塚 雅世

月昇るビルの谷間に雲切れて

佐藤 徹心

新酒の泡も盃に注ぎ分け

世 純

木版に紅葉の色を写し取る

純 肇

衣紋坂脇蔦屋開店

同 肇

お好みで王子様でも執事でも

純 心

プラネタリウムソファでまつたり

心 肇

肩の手が物言ひたげに上下して

肇 心

駄目な後輩何やらせても

心 肇

どん底のさらに底より冬の月

同 心

群れる小魚狙ふ鯪鱈

世 心

オロナイン塗つて済ませる漁村の子

世 心

里帰りには電気自動車

世 心

蛇払ひ尾を振る牛に花の降る

世 心

響きわたれるのどかなる鐘

純 肇

ナオ さすらいの旅に憧れ放哉忌

純 肇

深夜映画はもはや中毒

純 肇

好物のポテトチップを大人買い

世 心

凡フライでも二塁打となり

世 心

遠目にも青芝に影重なつて

純 肇

恋の手順はなべて省略

純 肇

マッチングアプリで出会ひ共に老い

千 心

昔タバコ屋今はコンビニ

心 肇

全国に古墳の数は五万超え

世 心

庚申塔を小鳥過ぎゆく

純 肇

脱藩の志士を見送る望の月

心 肇

曼珠沙華咲く茶屋でほろ酔ひ

純 肇

ナウ 栄転と言はれた支社はそぞろ寒

純 肇

空いた時間に軽く筋トレ

心 肇

音もなく人を吐き出す自動ドア

千 心

行進曲は終はることなき

肇 心

大聖堂羅旬十字は花の中

千 心

東の空にしゃばん玉吹く

心 肇

令和六年三月三日首尾

於 江東区芭蕉記念館

# 亀戸天神社奉納正式俳諧

## 俳諧之連歌二十韻

菅公の御影に春を惜しむかな

孝子

黒き牛の背晩霜の苑

転石

クレソンの白磁の皿によく映えて

雅子

スイッチ入れるシーリングファン

香織

海霧の上の月が流浪の涯の友

了斎

ウ 姫女苑折り捨てる少年

秀夫

妄想に君との恋はとめどなく

あき子

押し入れの中始祖鳥が飛ぶ

肇

もしやこれ手塚治虫のベレー帽

葵

見学コース旗立てててゆく

敦子

ナオ 特訓の甲斐あり遂に世界新

忠史

気球ゆつくり上がる大空

ひろみ

口説かれてみようあしたはクリスマス

徹心

心はそこにシベリアの彼

純子

名月に連山の蒼深まりぬ

明子

温泉宿に古酒のたのしみ

鑑

ナウ 文化の日にちよつと気取つて丸善へ

霞

輸入絵本を愛つる若者

有子

花の下マリオネットのバイオリン

千恵子

ヨモギの香り車座に満つ

執筆

## 配役

宗匠 鈴木千恵子

配 硯 近藤 純子

脇宗匠 武井 雅子

太鼓 根津 忠史

執筆 三木 俊子

奏 楽 佐々木有子

知司 江津ひろみ

座見 田中 秀夫

座配 石川 葵

花司 野口 明子

## 事務局だより

### ● 既往の行事

・ 一月二十六日(日)に、アルカディア市ヶ谷にて、第百七十回例会(初懷紙)を開催。二十韻興行。当日作品は4〜6ページに掲載。

・ 四月二十四日(木)に、亀戸天神社にて、第百七十一回例会(藤まつり例会)を開催。神楽殿にて正式俳諧興行(一般公開)の後、二十韻興行。当日作品は7〜9ページに掲載。

・ 六月二十二日(日)に、アルカディア市ヶ谷にて、同人会総会を開催。歌仙興行。当日作品は次号に掲載予定。

### ● 今後の行事予定

・ 七月二十日(日)に、江東区芭蕉記念館にて、第百七十二回(猫蓑会総会)を開催予定。歌仙興行。

### ● 猫蓑会リモート連句会

・ 第二十六回・第二十七回は四月十二日(土)・六月十四日(土)に開催、第二十八回は、八月十一日(山の日)に開催予定。

### ● 猫蓑基金にご協力ありがとうございます。

・ 渡辺 柚様 令和六年十一月 五千円  
・ 匿名 令和六年十一月 五千円  
・ 匿名 令和七年四月 四千元  
・ 匿名 令和七年五月 二万円

・ 匿名 令和七年六月 二千元  
\*基金口座 みずほ銀行新宿新都心支店  
猫蓑基金 普通預金 3376045

### ● 新同人

・ 松本端七

### ● 新入会員

・ 橋元カノン (東京都) 令和七年二月入会  
・ 小川裕司 (東京都) 令和七年四月入会

### ● 会員の訃報

・ 島村曉巳様が四月十一日にご逝去されました。享年九十二歳。謹んでご冥福をお祈りします。  
・ 長坂節子様が四月十二日にご逝去されました。享年八十四歳。謹んでご冥福をお祈りします。  
・ 山田美代子様が四月二十三日にご逝去されました。享年七十八歳。謹んでご冥福をお祈りします。

### 定期刊行 『猫蓑通信』 第百二十七号

令和七年六月三十日発行

発行人 猫蓑会 鈴木千恵子  
事務局 佐々木有子  
〒161-0033

東京都新宿区下落合4-9-34・313

編集人 平林香織

編集委員 岩崎あき子・奥野美友紀・佐々木有子・鈴木千恵子・武井雅子・田中秀夫

(五十音順)

印刷所 関東図書株式会社